

さまよえる絵筆－東京・京都 戦時下の前衛画家たち

2021年3月27日(土)～5月23日(日)

※会期中一部展示替えがあります。◆＝前期3月27日(土)～4月25日(日) ◇＝後期4月27日(火)～5月23日(日)

※リストの順番は展示の順と一致しない。

作家	作品名	制作年(和暦)	技法	所蔵
第1章 西洋古典絵画への関心				
福沢一郎	女	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館
福沢一郎	『雑記帳』失楽園	1937(昭和12)年	コンテ・紙	神奈川県立近代美術館
福沢一郎	二重像	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
福沢一郎	花	1938(昭和13)年	油彩・キャンバス	多摩美術大学美術館
小川原脩	ヴィナス	1939(昭和14)年	油彩・キャンバス	板橋区立美術館
小川原脩	双生児対話	1940(昭和15)年	油彩・キャンバス	横浜美術館
杉全直	沈丁花	1942(昭和17)年	油彩・キャンバス	うらわ美術館
杉全直	土塊	1942(昭和17)年	油彩・キャンバス	富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館
吉井忠	女(麦の穂を持つ女)	1941(昭和16)年	油彩・キャンバス	福島県立美術館
吉井忠	1505年フィレンツェ・マルテリ街Leonardの画室にて	1942(昭和17)年	インク、墨、紙	個人
吉井忠	薄田つま子	1941(昭和16)年	インク、紙	個人
吉井忠	薄田つま子	1941(昭和16)年	インク、紙	個人

第2章 新人画会とそれぞれのリアリズム

魏光	静物(雉)	1941(昭和16)年	油彩・キャンバス	東京都現代美術館
魏光	鳥	1941(昭和16)年頃	墨・紙	個人
魏光	花と蝶	1941-42(昭和16-17)年	油彩・キャンバス	練馬区立美術館
魏光	グラジオラス	1942(昭和17)年頃	油彩・キャンバス	横須賀美術館
魏光	蓮と太陽	1938-39(昭和13-14)年頃	墨・紙	個人
麻生三郎	とり	1941(昭和16)年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
麻生三郎	男	1941(昭和16)年	油彩・キャンバス	神奈川県立近代美術館
麻生三郎	女	1944(昭和19)年	油彩・板	板橋区立美術館
麻生三郎	一子像	1944(昭和19)年	油彩・キャンバス	板橋区立美術館
寺田政明	芽	1938(昭和13)年	油彩・キャンバス	板橋区立美術館
寺田政明	静物	1942(昭和17)年	油彩・キャンバス	練馬区立美術館
松本竣介	顔(自画像)	1940(昭和15)年	油彩・板	個人
松本竣介	婦人像	1942(昭和17)年	油彩・板	公益財団法人 大川美術館
松本竣介	裸婦a(模写)		インク、紙	公益財団法人 大川美術館
松本竣介	顔(自画像)	1942-43(昭和17-18)年頃	鉛筆、コンテ、紙	個人
松本竣介	三人	1942(昭和17)年頃	鉛筆、紙	個人
松本竣介	婦人像	1943(昭和18)年頃	木炭、紙	個人
松本竣介	橋(東京駅裏)	1941(昭和16)年	油彩・キャンバス	神奈川県立近代美術館
松本竣介	市内風景	1941(昭和16)年	油彩・板	個人
松本竣介	りんご	1944(昭和19)年	油彩・板	株式会社 小野画廊

第3章 古代芸術への憧憬

難波田龍起	ヴィナスと少年	1936(昭和11)年	油彩・キャンバス	板橋区立美術館
難波田龍起	ニンフの踊り	1936(昭和11)年	油彩・キャンバス	板橋区立美術館
難波田龍起	アクロポリスの空	1938(昭和13)年	油彩・キャンバス	個人
難波田龍起	ヒュプノス	1935(昭和10)年	鉛筆、水彩、紙	板橋区立美術館
難波田龍起	ミロのヴィナス		鉛筆・紙	板橋区立美術館
難波田龍起	マウソロス霊廟のフリーズ		鉛筆、水彩、紙	板橋区立美術館
難波田龍起	テセウス		鉛筆、コンテ、紙	板橋区立美術館
難波田龍起	釈迦三尊	1943(昭和18)年	油彩・板	個人
難波田龍起	薬師如来	1943(昭和18)年	油彩・板	個人
難波田龍起	仏坐像	1943(昭和18)年	油彩・キャンバス	世田谷美術館
難波田龍起	阿修羅像		鉛筆、コンテ、紙	個人
難波田龍起	法隆寺夢殿 救世観音像		コンテ、紙	個人
難波田龍起	法華寺十一面観音		鉛筆、コンテ、紙	個人
難波田龍起	薬師寺東院堂聖観世音菩薩像		鉛筆、コンテ、紙	個人
難波田龍起	法隆寺大宝蔵院百濟観音像		鉛筆、コンテ、紙	板橋区立美術館
難波田龍起	健甕羅佛像		鉛筆、コンテ、紙	板橋区立美術館

作家	作品名	制作年(和暦)	技法	所蔵
難波田龍起	金堂の壁画習作	1943(昭和18)年	油彩・キャンバス	世田谷美術館
難波田龍起	埴輪について	1943(昭和18)年	油彩・キャンバス	世田谷美術館
難波田龍起	埴輪		インク、水彩、紙	板橋区立美術館
難波田龍起	埴輪		鉛筆、水彩、紙	個人
難波田龍起	埴輪		鉛筆・紙	個人
難波田龍起	埴輪		鉛筆・紙	個人
山口薫	黒耀石	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	世田谷美術館
山口薫	石を彫る人物		鉛筆、紙	個人
山口薫	構想(ほには)		鉛筆、紙	個人
小野里利信(オノサト・トシノブ)	はにわの人	1939(昭和14)年	油彩・板	東京都現代美術館
小野里利信(オノサト・トシノブ)	一ツの朱の丸(朱の丸)	1939-40(昭和14-15)年	油彩・板	東京都現代美術館
長谷川三郎	都制	1937(昭和12)年	毛糸、綿、小豆、ガラス、厚紙	学校法人甲南学園 長谷川三郎記念ギャラリー
長谷川三郎	新聞コラージュ	1937(昭和12)年	コラージュ(紙、新聞紙)、インク、淡彩、紙	学校法人甲南学園 長谷川三郎記念ギャラリー

第4章 「地方」の発見

吉井忠	『東北記(1)馬市・岩手ヨリ青森へ』『東北記(3)秋を行く・香川の春』	1941-44(昭和16-19)年	鉛筆、ペン、原稿用紙	昭和のくらし博物館
吉井忠	鋤踏み	1943(昭和18)年	油彩・キャンバス	個人
吉井忠	スキフミ	1943(昭和18)年	鉛筆・紙	個人
吉井忠	ソバを蒔くうね(スキフミ)	1943(昭和18)年	鉛筆・紙	個人
吉井忠	毛馬内風景	1943(昭和18)年	油彩・キャンバス	福島県立美術館寄託
吉井忠	《毛馬内風景》のためのスケッチ	1943(昭和18)年	鉛筆・紙	個人
吉井忠	山村の形態	1941(昭和16)年	鉛筆・紙	個人
吉井忠	木地師の山小屋	1942(昭和17)年	インク、紙	昭和のくらし博物館
吉井忠	杓子・鋳の製作過程	1942(昭和17)年	インク、紙	昭和のくらし博物館
吉井忠	道具	1942(昭和17)年	インク、紙	昭和のくらし博物館
吉井忠	南会津山村報告記	1942(昭和17)年	鉛筆、インク、紙	個人
吉井忠	佐々木カヨ 金沢村ニテ	1942(昭和17)年11月23日	鉛筆・紙	個人
吉井忠	福島信夫山	1943(昭和18)年2月14日	鉛筆・紙	個人
吉井忠	秋田曲田部落	1943(昭和18)年	鉛筆・紙	個人
吉井忠	曲田福音会堂	1943(昭和18)年	鉛筆・紙	個人
吉井忠	青森県三戸郡階上村 桑原一郎氏宅	1943(昭和18)年10月10日	鉛筆・紙	個人
吉井忠	青森県階上村	1943(昭和18)年10月11日	鉛筆・紙	個人
吉井忠	花巻豊里町 宮沢政次郎氏宅	1943(昭和18)年10月12日	鉛筆・紙	個人
吉井忠	豊浦町 佐藤弥助氏宅	1944(昭和19)年	鉛筆・紙	個人
吉井忠	齊川村	1944(昭和19)年	鉛筆・紙	昭和のくらし博物館
吉井忠	安達ヶ原	1944(昭和19)年9月5日	鉛筆・紙	個人
福沢一郎	侵蝕『秩父山塊』より		コンテ・紙	個人

第5章 京都の「伝統」と「前衛」

北脇昇	非相称の相称構造(窓)	1939(昭和14)年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
北脇昇	廣誠院庭園		鉛筆・パステル・紙	個人
北脇昇	コンポジションA		インク、鉛筆、紙	東京国立近代美術館 ◇
北脇昇	文化類型学図式	1940(昭和15)年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
北脇昇	竜安寺石庭測図	1939(昭和14)年頃	墨、インク、鉛筆、色鉛筆・紙	東京国立近代美術館 ◆
北脇昇	竜安寺石庭ベクトル構造	1941(昭和16)年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
北脇昇	飽なき探究 逞しき実践	1944(昭和19)年	紙本墨画淡彩	廣誠院
	共同制作《浦島物語》	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
吉加江清(京司)	浦島亀を救ふ(憧憬)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
小石原勉	亀の迎へ(誘惑)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
北脇昇	海上へ(好奇)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
原田潤	海底を(愛慕)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
安田謙	龍宮見ゆ(歓喜)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
今井憲一	龍宮に着く(讃嘆)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
松崎政雄(八笑亭)	乙姫に会ふ(恋着)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
井上(村上)稔	龍宮の生活:A(親和)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館
田村一二	龍宮の生活:B(感嘆)	1937(昭和12)年	油彩・キャンバス	京都市美術館

	作家	作品名	制作年（和暦）	技法	所蔵
三水公平	龍宮の生活：C（虚無）		1937（昭和12）年	油彩・キャンバス	京都市美術館
小栗美二	龍宮の生活：D（魍魎）		1937（昭和12）年	油彩・キャンバス	京都市美術館
小牧源太郎	郷愁を訴ふ（倦怠）		1937（昭和12）年	油彩・キャンバス	京都市美術館
杉山昌史	玉手笥に誓ふ（執着）		1937（昭和12）年	油彩・キャンバス	京都市美術館
島津俊一（冬樹）	玉手笥は遂に開かれた（批判的現実）		1937（昭和12）年	油彩・キャンバス	京都市美術館
小牧源太郎	生誕譜No.1		1938（昭和13）年	油彩・キャンバス	板橋区立美術館
小牧源太郎	道祖神		1950（昭和25）年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
小牧源太郎	《形象石》習作		1941（昭和16）年	鉛筆、紙	伊丹市立美術館 ◆
小牧源太郎	仏頭		1943（昭和18）年	油彩・キャンバス	ギャラリー宮脇
小牧源太郎	《仏足石》習作		1944（昭和19）年	鉛筆、紙	伊丹市立美術館 ◇
小牧源太郎	《壁画（十一面観音像）》習作		1943（昭和18）年	鉛筆、紙	伊丹市立美術館
小牧源太郎	弥勒石		1944（昭和19）年	油彩・キャンバス	京丹後市教育委員会
小牧源太郎	如意輪と梟		1944（昭和19）年	油彩・キャンバス	京丹後市教育委員会
	共同制作《鴨川風土記序説》		1942（昭和17）年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
北脇昇	鴨川風土記序説（平安京変遷図）		1942（昭和17）年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
小牧源太郎	鴨川風土記序説（藤原時代）		1942（昭和17）年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
吉加江清	鴨川風土記序説（足利時代）		1942（昭和17）年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
原田潤	鴨川風土記序説（桃山時代）		1942（昭和17）年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館
小石原勉	鴨川風土記序説（徳川時代）		1942（昭和17）年	油彩・キャンバス	東京国立近代美術館

作家略歴

【凡例】本展で紹介する作家に関する略歴である。おおよそ本展の展示順で並べた。

福沢 一郎 ふくざわ いちろう（1898-1992）

群馬県北甘楽郡富岡町（現・富岡市）生まれ。1918年に東京帝国大学（現・東京大学）文学部に入学、1924年に渡仏。1931年の第1回独立美術協会展にパリから出品したコラージュの技法を絵画に応用した作品は画壇に衝撃を与え、日本におけるシュルレアリスム絵画の出現と言われた。1931年帰国、1939年に独立美術協会を脱退し、美術文化協会を結成。1941年4月、シュルレアリスムと共産主義との関係を疑われて逮捕され、同年11月に釈放。画家として戦地に派遣される予定があったが、地震のため取りやめとなる。疎開先の軽井沢で終戦を迎えた。戦後は多摩美術大学、女子美術大学に教授として迎えられ、後進の指導にあたった。

小川原脩 おがわら しゅう（1911-2002）

北海道虻田郡俱知安村（現・俱知安町）生まれ。1930年に東京美術学校西洋画科に入学。1933年に第14回帝展に入選するが、アカデミズムに対して疑問を持つ。卒業後に福沢一郎のアトリエを訪ね、彼の勧めでエコール・ド・東京に参加。1937年からは独立美術協会展に出品。シュルレアリスムに惹かれていたという。1938年に創紀美術協会、翌年は美術文化協会、そして新浪漫派に参加。1943年に中野時代の先輩からの誘いで決戦美術展に出品し、陸軍大臣賞を受賞。1944年に作戦記録画制作の委嘱を受ける。1945年3月の東京大空襲に遭い、故郷の北海道で終戦を迎えた。戦後も故郷で制作を続け、全道展や地元の展覧会への出品の傍ら、北海道の大学で教鞭をとった。

杉原直 すぎまた ただし（1914-1994）

東京府荏原郡大井町（現・品川区）生まれ。兵庫県姫路市育ち。1933年に東京美術学校油画科に入学。在学中にシュルレアリスムに関心を持ち、福沢一郎を知る。卒業前年の1937年に同級生とグループ貌を結成。展覧会ではサルバドール・ダリやマックス・エルンストの作品に刺激を受けた作品を発表する。卒業後の1939年に独立美術協会賞を受賞。同年に兵役につくが、病のため1941年に除隊。出征中に美術文化協会の設立に参加、第1回展にも出品した。1945年の「陸軍美術展覧会」で陸軍大臣賞を受賞。終戦は疎開先の福島で迎えた。戦前の作品の多くは戦の仲間である加藤太郎のアトリエに預けていたが、空襲に遭い焼失。戦後は母校の東京藝術大学などで教鞭をとった。

吉井 忠 よしい ただし（1908-1999）

福島県福島市生まれ。福島中学では、後に政治家、兵庫県立近代美術館長となる阪本勝に学び、歌人であった校長の浪岡茂輝に出会い、影響を受ける。1926年に上京。太平洋画会研究所に通い、寺田政明、麻生三郎らと知り合う。1928年第9回帝展に初入選するも、前衛絵画に関心を持ち、1936年より独立美術協会展に出品。同年にエコール・ド・東京に参加。同年10月より翌年夏にかけて渡欧。ループル美術館の古典絵画に感銘を受ける。1938年に創紀美術協会、翌年は美術文化協会の結成に参加し、以後1946年まで同展に出品。1945年4月、空襲への備えを目的とした建物疎開のため池袋のアトリエを壊し、福島に帰郷。戦後は自由美術家協会展や日本アンデパンダン展、樹展などに参加した。

古沢岩美 ふるさわ いわみ（1912-2000）

佐賀県三養基郡（現・鳥栖市）生まれ。1928年、画家を志して上京し、同郷の画家、岡田三郎助の書生をしながら本郷絵画研究所に通う。1934年頃に岡田邸を出て池袋モンパルナスに暮らすようになり、寺田政明、巖光らと知り合う。1936年、池袋美術家クラブに参加。福沢一郎を知り、シュルレアリスムに傾倒する。1938年に創紀美術協会、1939年に美術文化協会結成に参加。同年には東京朝日新聞の懸賞小説「桜の国」（大田洋子作）の挿画画家に選ばれた。1943年に召集され従軍し、中国大陸で捕虜となる。戦後は裸婦に加え、従軍体験などを交えた作品を発表した。戦前、戦中の作品の多くは火災により焼失している。

巖光 あいみつ（1907-1946）

広島県山県郡壬生町（現・北広島町）生まれ。本名は石村日郎。1923年に大阪の天彩画塾に通い、この頃から巖川光郎の名を使い始める。1924年、上京し太平洋画会研究所に通い、井上長三郎らと出会う。1926年より二科展、1927年には一九三〇年協会展に出品し奨励賞を受賞、その頃、中央美術展、広島県美術展覧会、白日電展、機関社展などに次々と出品。1931年には池袋モンパルナスに暮らし、寺田政明らとの交流が深まる。1938年、第8回独立美術協会展で、『風景（眼のある風景）』が独立美術協会賞を受賞。1939年、美術文化協会に参加。1943年、新人画会結成に参加するが、1944年5月に召集を受け中国大陸に渡る。1946年1月に上海の病院で戦病死した。

長谷川三郎 はせがわ さぶろう（1906-1957）

山口県豊浦郡長府町（現・下関市）生まれ。神戸市育ち。甲南高校在学中より画家を志して、大阪信濃橋研究所で小出楯重に師事。1925年、東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学。1929年に『雪舟研究』を提出して卒業。直後にアメリカ、ヨーロッパ各地を旅した後、パリの展覧会に出品。1932年帰国、1934年に新時代洋画展に創立。1937年、自由美術家協会を結成。同年に『アブストラクトアート』（近代美術思潮講座第6巻、アトリエ社）を出版。1938年に中国を旅行し、大同大仏を題材とした写真を発表。1940年、芦屋に転居し、茶道、座禪、俳句を学ぶ。1944年に滋賀県に疎開し終戦を迎えた。戦後はイサム・ノグチと交友を持ち、アメリカと日本を往復しながら制作と発表を続けた。

北脇昇 きたわきのぼる（1901－1951）

愛知県名古屋市生まれ。9歳で京都に住む叔父・廣瀬滿正の居宅に身を寄せる（現廣誠院）。同志社中学校で所屬し、雨森行の指導を受けた。独立美術京都研究所に入所し、その機関紙『TOILE』の編集部員として尽力する。1935年、第5回独立美術協会展に初入選。同年、朝日新聞社京都支局新社屋（朝日会館）の外壁に計画された巨大壁画の制作や、新日本洋画協会に参加する。戦後は無所属となり児童画の指導をするも、1961年から読義生活に入る。

井上 稔 いのうえみのる（1918－没年不詳）

独立美術京都研究所に入所、1935年、新日本洋画協会にも参加する。1937年、第7回独立美術協会展に初入選。

田村 一二 たむらいちじ（1909－1995）

京都府加佐郡余部町（現舞鶴市）生まれ。1930年に京都市教員養成所を卒業後、小学校勤務の傍ら、鹿子木孟郎の画塾に通い始める。1932年、休職し京府立師範学校専攻科で絵画を学ぶ。卒業後は京都市滋野小学校の特別学級を担当、障害児教育に着手。1934年、独立美術京都研究所に入所、翌年、第5回独立美術協会展に初入選。1936年、第2回新日本洋画協会展の隣室で「児童画展」を催す。1940年、美術文化協会の会員となる。1942年に著書「忘れられた子等」、1944年に『手をつなぐ子等』を出版。

1944年に石山学園、1946年に近江学園、1961年に一妻寮を設立し、障害児教育を先導し続けた。

三水公平 さみず こうへい（1904－1990年頃）

長野県上水内郡生まれ。1929年、津田青楓洋画塾に入塾。1932年、第19回二科展に初入選。同年、京都洋画協会に参加。1933年から独立美術京都研究所に入所、1935年には新日本洋画協会に参加する。1939年に京都から東京に移住。1940年、美術文化協会の会員となる。1941年、3度目の召集で歩兵第150連隊（松本市）の子機機関銃中隊に編入、1944年まで中国東北部、台湾、インドネシアなどを転々とする。ジャワ島の出版社から『陣中写生画集』（第4626部隊編纂）を発行。戦後は、サロン・ド・ジュワや豊島区美術協会の会員となる。

小栗 美二 おぐりよしじ（1903－1969）

岐阜県可児郡生まれ。東京美術学校に入学し黒田清輝や岡田三郎助に師事。1923年中退、小山内薫の演劇映画研究所美術部員となる。1925年、日活京都撮影所の現代劇部門に在籍し、サイレント映画のためのカットデザインを担当。津田青楓洋画塾に入塾し昭和初年頃、プロレタリア芸術運動にも参加。1931年、第18回二科展に初入選。1933年、独立美術京都研究所に入所。1935年、新日本洋画協会にも参加する。1936年に創刊した隔週新聞「土曜日」では、表紙の題字やカットを担う。1935年から第一映画、解散後は新興キネマ、1944（昭和19）年からは旧満州に渡り満州映画協会に参加する。戦後は京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）で教鞭をとり、アトリエ・ラ・クラテという美術研究所を主宰する。

杉山 昌文（生年不詳－1939）

独立美術京都研究所に入所。1935年、新日本洋画協会にも参加する。1938年、第8回独立美術協会に初入選。

島津 俊一（冬樹）（1910－1958）

独立美術京都研究所に入所。1935年、新日本洋画協会にも参加する。1934年12月から龍安寺の大殊院に下宿を始めた。1935年、第5回独立美術協会展に初入選。1937年頃から「俊一」のほかに「冬樹」の名で作品を発表している。

麻生三郎 あそう さぶろう（1913-2000）

東京市京橋区（現・中央区）生まれ。関東大震災を機に、親戚の家に身を寄せ、東京帝国大学で造船を学ぶ次男と文化や芸術について語り合い、彼の蔵書にある西洋絵画の画集に親しむ。明治学院中学卒業後、太平洋美術学校に学ぶ。1935年に美術評論家の外山卯三郎の企画による「日本超現実主義作家展」に出品。1936年、エコール・ド・東京に参加。1938年春に渡欧し、フランス、イタリア、ベルギーをめぐり、同年晩秋に帰国。1939年、第9回独立美術協会展に初出品・初入選。同年、美術文化協会に参加。1943年に新人画会を結成。1945年、空襲でアトリエと作品を焼失。戦後1947年、自由美術家協会に参加。戦後は制作を続けながら武蔵野美術大学で後進の指導にあたった。

寺田政明 てらだ まさあき（1912-1989）

福岡県八幡市（現・北九州市）生まれ。1928年に画家を志して上京。1930年、太平洋美術学校に入学。学校近くの茶房り・おむに麻生三郎や松本城から集い、巖光らとも知り合う。1932年、第2回独立美術協会展に初入選。1933年、豊島区長崎町に転居。詩人の小橋秀雄と親交を持つ。1936年、エコール・ド・東京に参加。1938年に創紀美術協会、1939年に美術文化協会へ参加する。1943年、新人画会を結成。1944年には従軍画家として中国大陸に渡る。1949年、自由美術家協会に参加。1964年、主体美術協会結成。1970年、樹展を結成し作品発表を続けた。

松本竣介 まつもと しゅんすけ（1912-1948）

東京府豊多摩郡渋谷町（現・渋谷区）生まれ。盛岡育ち。1925年、岩手県立盛岡中学校の入学時に聴覚を失う。1929年に上京し、太平洋画会研究所に通う。1935年、二科展に初入選。1936年、結婚により松本姓となり、下落合に転居。同年、『雑記帳』を創刊（翌年2月の14号で廃刊）。1939年にフォルム展に出品。1941年『みづぶ』に「生きてみる画家」を投稿。1943年に巖光、麻生らと新人画会を結成。1944年頃、「竣介」に改名。同年には理研科学映画に勤務し、動画の制作に携わった。戦後1946年、『全日本美術家に語る』を画家や知識人に送付する。1947年、自由美術家協会に参加するが、1948年に逝去。

難波田龍起 なんばた たつおき（1905-1997）

北海道旭川市生まれ。東京育ち。1923年の関東大震災を機に近所に暮らす高村光太郎と知り合い、文学や哲学などの教えを受ける。高村の紹介で画家、川島理一郎の主宰する研究会、金曜会に参加。1933年頃より松本竣介との交友が始まり、松本が関わっていた『雑記帳』などに寄稿。古代ギリシア芸術への憧憬を深め、ギリシア彫刻をモチーフにした作品を制作。1937年より自由美術家協会に参加。画業を続けながら1944年、東宝航空資料製作所に入社し、1951年まで勤務。1959年に自由美術家協会を退会し、以後無所属。戦後、1950年頃からの作品は街や建物を抽象化したものになり、ドリッピングなども試みるようになる。1970年代からは古代や生命など普遍的なテーマを追求した。

山口薫 やまぐち かおる（1907-1968）

群馬県箕輪村（現・高崎市箕郷町）生まれ。1925年、東京美術学校西洋画科に入学。翌年、第7回帝展で初入選。在学中、画家の川島理一郎が主宰する研究会金曜会に参加。以後、アカデミックな写実を離れる。卒業後に渡仏し、1933年に帰国。この時、古典から同時代までの芸術に触れ、その後に活動を共にする仲間を得た。1934年、パリ時代の仲間である長谷川三郎、村井正誠、矢橋六郎らと新時代洋画展を結成。この会で山口は「新浪漫派」のグループに参加。1937年に自由美術家協会を結成。1945年の4月頃に故郷に疎開し、終戦を迎えた。戦後は自由美術家協会を脱退した仲間と共に結成したモダンアート協会に参加。武蔵野美術学校、東京藝術大学で教鞭を執り、後進の指導にあたった。

小野里利信 おのさと としのぶ（1912-1986）

長野県下伊那郡飯田町（現・飯田市）生まれ。群馬県育ち。1952年頃から「オノサト・トシノブ」と表記。1931年、津田青楓洋画塾に通う。1933年、小野里がモデルをつとめた『犠牲者』制作中の津田青楓が検査され、研究所は解散。1935年、黒色洋画展を結成し、月1回の展覧会を開催。1937年、自由美術家協会に参加。1942年11月に召集され、満洲へ渡り終戦を迎え、その後3年間シベリアで抑留生活を送る。戦後は群馬に戻り、美術教師などをしながら発表を続ける。また、1950年代中頃より、彼の作品は丸と直線による抽象的なものとなり、日本のみならず海外からも招待を受けて作品を発表するようになる。